

存在していいのか

ほった
すなお
堀田 素生

「自分はこの世界に存在してはいけない」と思うということは、自身のことを「世界に影響を与えうるほどの大きな存在」と認識しているということであり、卑屈に見せかけた自信家なのだろうと思う。

*

2022年8月上旬。私は都内の池袋周辺で、ある事件に出くわしてしまった。

その日は恋人（イマジナリーなもの。みなせ92号「仮想の恋人」参照）との記念日だった。某ホテルで

ビュッフェランチをとり、近辺にある音楽ホールでクラシックコンサートを楽しみ、ささやかだが特別な一日を過ごす予定だった。しかしその事件のおかげで私
は一日をほとんど台無しにする羽目になったのだ。事件はランチの時に起きてしまった。

私と恋人は席に案内され、料理を取りに行き、座ろうとした。しかし料理がよそわれた皿で両手が塞がっていたため、椅子を引くことが出来ない。一旦テーブルに皿を置いて、椅子を引き着席しようとした。

「どいてくれ〜」

その時、背後から突然気の抜けた、しかし明らかに苛立ったような声が聞こえた。客席フロアは、テーブルとテーブルの間がやけに狭く、ひと一人やっと通れるかどうかといったくらいだ。

私はテーブル脇の通路に立ち、皿を置いていたため、

通路を塞いでしまっていたようだった。後ろのテーブルの客がちょうどタイミング悪く自分の椅子の前に立って、ぐずる子供を宥めていたため、私が私の椅子の後ろに回り込むスペースが無かった。そのために私は通路を塞ぎ、誰かにとつて邪魔な存在となってしまうたのである。

やけにギチギチなテーブル配置が仇となっていた。「どいてくれ〜」という声質と、その行動にやけに幼さを感じた（ふつうは邪魔だからといって初対面の他人にそんな口の利き方はしないだろうし、そんなことをするのは子供くらいだろうと思っただけ）ため、中高生くらいの子供かと思ひ振り返したら、自分より歳のいってそうな大人の女性だったため、面食らってしまった。それでも、とっさに身を躲して通路を開けた。

連れと思しき男性と自分たちの席まで去っていったが、私はこの瞬間から既に朦朧としていたように思う。たったそんなことで大袈裟な、と自分でも思うが、「邪魔」と言われることは私にとってあまりにも特別な意味を持つことだった。

存在は時に邪魔になる。

例えば朝の混んだ電車で、私の目の前の席の乗客が降り、席が一つ空いたでしょう。そのふいに空いた席に私が座ると、立ってつり革につかまっている他の人は私がそこに座っている間、もうその席には座れなくなる。

このように、人はそこに居ると物理的空間のある特定の座標（位置）を占めることになる。その位置には他の誰も存在できなくなるので、存在するということは、他の誰かから存在することを奪うという事と同義だとも言えるかも知れない。

私が立っているため通路が通れなくなっているという状況から言って、恐らく彼女は物理的空間においてという意味で「どいてくれ〜」と発したのだと思う。

物理的存在とは身体を意味する。身体とはつまり生命のことであると考えられる。現代では中世に比べ宗教的解釈が一般的ではなくなり、世界の見方として科学が優位であり、存在とは魂ではなく身体（生命）と

いう見方が一般的になっている。「(物理的な意味で) 邪魔」とはその人の生命や身体を否定する言葉だと言えるかもしれない。

しかし「物理的な意味で邪魔」とは、二つの意味で解釈が可能であり、それぞれ重要な違いを持つ。ひとつは、「その位置にすることが邪魔」。もうひとつは、「この世界(物理的空間という意味での宇宙)にいることが邪魔」。

多くの人は「どいてくれ〜」という彼女の言葉に、前者の意味を見出すだろうし、もし自分が言われた時もそう解釈するだろう。後者はまさに、どこにおいても存在しないで欲しいという願望が込められているため、生命の否定そのものだろう。

しかし、これらを区別することが本当にできるのだろうか。確かに私は「その位置にすることが彼女にとって邪魔」であり、裏を返せば「別の位置であれば存在していても構わない」ということであり、全く初対面の他人という関係性から言っても、「存在して欲しい」まで行かずとも少なくとも私がこの世界に存在し

ていいかどうかには彼女は無関心であることが推察できる。

しかしそもそも私が生まれて来なければ、あの日の時間私はあの場所に存在し得なかったはずだし、そうなればあの通路を塞いで彼女に「どいてくれ〜」と言わせることもなかったはずだ。そう考えれば、「ある位置にすることが邪魔」なのか、それとも「この世界にすることが邪魔」なのかは「どいてくれ〜」の一言のみでは分からないように思える。この世界に居なければ、「ある位置にすることが邪魔」という状況は起りえないからだ。私は自分がなぜあのような衝撃を受けてしまったのかがわかった。その区別の困難さによって、彼女は私の主観(心的世界)において、「私がその位置にいることを非難することによって私の存在を否定している、つまり生まれてこなければ良かったの」と思っているかも知れない。人物として現れた。そのため私は、存在することに対する許可が揺らいでしまったかのような不安に陥ってしまった。否、元から生まれてきてよかったのか、存在していいのか、

自分の存在価値を疑って生きているからこそ「どいてくれ」のたった一言でここまで精神をかき乱されてしまったのかも知れない。

私は恋人を巻き込みたくなかったので、ちょうど恋人には「どいてくれ」は聞こえていなかったようだったし、平静を装いながら全く味のわからない食事を済ませホテルを出た。が、何とも具合が悪い。その動揺からか、なんだか世界がやけに遠くにあるような気がしてまともに歩けないのである。コンサートの開演までプラネタリウムか水族館に行こうと思っていたが、それもこの状態では無理だろう。見ず知らずの他人によるたった一言でこんなことになってしまっただけなのに、情けなかった。どうにも普通でいられそうに無かったので、「熱中症気味だ」と恋人に嘘を言っただけで、どこかで休ませて欲しいと願った。

目に入ったネットカフェに入り、個室で私はほとんど呆然としていた。フリードリンクの熱い紅茶を啜ったり、一緒にアニメ（「プリンセスチュチュ」）を観たりしていたが、あまり頭に入らない状態だった。その

後少しましになったが、相変わらず朦朧としたままネットカフェを出て、音楽ホールへ行った。素晴らしかったはずのクラシックのコンサートもほとんど耳に入っていないまま、一日が終わってしまった。

*

これを書いている途中、私は単にどこかでこの話をすることによってあの時「どいてくれ」と私を邪険に扱った見ず知らずの彼女を罰したいんじゃないのかと、思い始めたが、きつとこれ見よがしにつらそうにして、相手の良心に訴えるのが自分なりの反撃手段なのだろうと思った。あの彼女は見てないのに！

存在しているのかという疑いもそうだ。

私はきつと、生育過程の中で私にそう思わせた世界か、運命か、両親かわからないがそういうものに対して、相当な怒りをため込んでいる。これ見よがしにつらそ

うに自分の存在価値を疑うことは、多分私にとって怒りの表現であり反撃なのだろう。

*

「誰一人に対しても不快な思いをさせたくないし傷つけない」という潔癖さは、「人は人に不快な思いをさせてはいけないし傷つけてはいけない」という「人間に対する非現実的な理想」が元になっている以上、裏返せば「何人たりともこの私に不快な思いをさせたり傷つけてはならない」という期待であり、あまりにも子供じみた尊大さだ。

(2022年9月 水槽の水音がかすかに聞こえる部屋)